

編集後記

今年度はアベノミクスが始まり、その期待感によるものと思われるが、久し振りに我が国に明るさが戻ってきた。しかし、もちろん問題がないわけではない。例えば原発問題である。まず、原発のエネルギーの中での位置付けである。従来どおり原発を主要エネルギーの一つとして考えるかどうかである。そして、差し迫っては、原発の再稼動を認めるかどうかである。

本来なら、この問題の鍵を握るのが、我が国のエンジニアリングであり、そのエンジニアのはずであるが、そのような観点からの議論がまともに行われているようには思われない。さすがに、原発事故についてのまともな意見が聞けるようになったのは事実ではあるが、極めて弱い意見でしかなく、社会的決断を迫るようなものではない。

もう一つの問題は、国際政治の問題である。つまり靖国神社参拝の問題である。この問題は、戦後行われた軍事裁判により発生した根が深い問題であり、参拝を止めるのは国民感情として受け容れがたいし、いまさら軍事裁判を否定する状況にはない。盟友米国を怒らせることになるからである。

すなわち、この二つの問題は即刻けりがつくような状況でないというといういみでは、共通の課題であるともいえよう。あるいは、社会問題というものは、常にこのような難しさを持っているのかも知れない。解は、長期的には我々当事者が共通の理解と目標を持ち、その解が実現できるように、賢く立ち回って、我々を取り巻く環境を整備していくしかないであろう。

そのような賢い知を、我が国に広めるのが「総合知学会」の責務でなかろうか。そして、今回この学会誌に収録した幾つかの論文に、そのヒントが画されていると信じたものである。

なお、今回学会誌を編集するに当って、研究論文に「図表」ではない「絵」を掲載することの是非が議論された。まず、起案者が次のように弁明している。

「ひとつの実験と考えました。個人的なことで恐縮ですが、大病をしたあと、しばらく論理的な思考が停滞した状態でしたが、趣味ではじめた絵画を毎日、せつせと集中的に描くことで気づくと再び、自分の論理回路が活性化し、発想にも柔らか味がでること、そしてなによりも集中力が得られました。今回の論文の過程では、ブログや研究会に小まめに発表しましたが、文章のセクションマーカの遊びのつもりで、同じ時期に描いた絵をいれました。「生意写生・生命直写」、ありがたいことに、文章と、ある種の共鳴をしておもしろいと賞してくださる方があらわれ、ついで本論にも入れたらどうかというご提案をいただきました。個人的には、絵を描くことが、この研究の取り組みに終始背中を押してくれたという感謝の念があります。とはいえ「総合知」という本学会名に便乗してしまうことは軽率なことですが、ちょっとアカデミック・ルネサンスへのささやか

なこころみとして 御願ひ申し上げたものであります。 実験です」

ということで、この実験を学会として受け入れることになった。編集者としても、近い将来、学会誌論文のあり方に一石を投じることになることを期待したい。

小松昭英